2024年4月2日（火） 17:00-18:30
東京大学駒場第一キャンパス 101号館 11号室・オンライン

戦後思想史としての「占領」あるいは“occupation”

ミカエル・リュケン
Michael Lucken

フランス国立東洋言語文化大学(INALCO)日本学部教授
美学・芸術・日本思想史研究者。2019年にGrand prix des Rendez-vous de l'histoire賞を受賞。主著は*L'universel étranger* (2023), *Le Japon grec* (2019), *Nakai Masakazu. Naissance de la théorie critique au Japon* (2015),『20世紀の日本美術（同化から越境への軌跡）』(2007/2016), *Japan's Postwar* (2011)。

講演要旨:

日本語の「占領」という言葉は、単に空間的な意味合いを持っている。しかし、英語では“occupation”は時間的な意味も含んでおり、1945年以降、米国占領軍が日本で何をしようとしたのかを正しく理解するためには、そのニュアンスを解明する必要がある。本講演では、思想史の観点からこの概念のプラグマティズム的ルーツを明らかにした後、英語の“occupation“という考え方が日本語に見られるのか、それとも西洋言語に特有のものなのかを検証する。

参加登録:
https://forms.gle/3tSAD9JfXyvQEN1p8
右のQRコードより登録可能（オンライン参加希望者のみ）
講演言語: 日本語
司会: 桑山裕喜子 (UTCP)

主催: 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター (UTCP)
共催: 東京大学東アジア藝文書院 (EAA)